

前途厳しい江沢民体制

軍の掌握力に不安

鄧小平氏の影は消えず

中国の最高実力者、鄧小平氏が最後のポストである党中央軍事委主席の地位を辞任したことが明らかになったが、その経過、背景には不透明な部分が少ない。少なくとも、鄧氏のこれまでの実績は変わらず、内外のイメージアップを狙った実質のともなわぬ「華任劇」といえる。

鄧氏は八七年十月から十一月まで放さず、実質的に軍を支配にかけての党第十三回全国代表大会（十三全大会）で、政治局常務委員のポストを去ったばかりか、中央委員にも立候補せず、ヒラの党員となった。だが、党中央軍事委主席のポストだけは、党規約を「改正」して

中国の最高実力者・鄧小平氏が党中央軍事委主席を辞任したが、これは本意に「引退」を意味するのか。後継者に軍歴のない江沢民党総書記を選んだ理由は何か。この時期を選んだのはなぜか。中国の政治や軍事問題の専門家に聞いた。

中国の最高実力者・鄧小平氏が党中央軍事委主席を辞任したが、これは本意に「引退」を意味するのか。後継者に軍歴のない江沢民党総書記を選んだ理由は何か。この時期を選んだのはなぜか。中国の政治や軍事問題の専門家に聞いた。

専門家に聞く

軍が発言力増すことも

決めておかなければ必ずゴタゴタが起きる、と考えていた。江沢民総書記という党のトップが後継者につくのは、理屈の通った選択だ。この人が総書記になったのも鄧氏の強い意向だった。ただ、江氏には、知られている限りでは軍歴がない。中国では、軍歴、軍功のない人間は軍の中でさほど向かれない。だから、鄧氏のような実力者が背後で目を光らせていなければ、軍を引っ張ることができない。しかし鄧氏も年齢からみて、もう何年もそういった威光を保てるわけではない。江体制



伊達 宗義氏
拓殖大学海外事情研究所長

鄧小平氏がこの時期に党中央軍事委主席を退いたのは、もうこれ以上は後継者選びを待てない時期にきていたということだ。自分の目の黒いうちに後継者を

を定着させる期間を持つためには、もう待てなかつたわけだ。党中央軍事委副主席から第一副主席になった楊尚昆氏は、軍歴からいえば一番適当だが、八十二歳とあまりにも高齢すぎた。しかし、江氏がトップになるとしても、実際に軍を動かすのは楊氏だろう。そういう取引が必ずあったはずだ。江氏は、鄧氏にがらみをきかせている間に軍内に人脈をつくり、やがて真のトップに定着する、という筋書きだろう。だから、鄧氏はすべてのポスト



矢吹 晋氏
横浜国立大学教授

表看板だけ「穏健派」に

トから退いたといっても、本意の引退でないのはもちろんだ。今後も最高実力者であることに変わりはないだろう。

この先、注目したいのは、趙紫陽前総書記、胡啓立元政治局常務委員がやめた政治局委員の穴が補充されるかどうかだ。江氏

鄧小平氏は今年六月、江沢民氏の総書記就任を決めた時点で、「中央軍事委主席のポストも譲る」と言明していた。その意味では既定の路線通りと言え

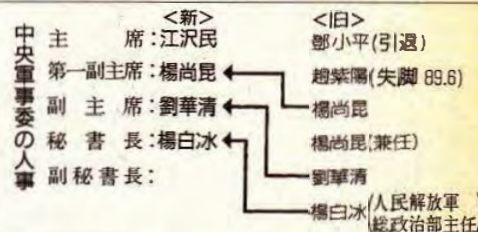
なから、党のトップである総書記が中央軍事委主席を兼ねるのは自然、とも言える。とは言っても、実は今回の人事はかなり難航したようだ。鄧氏の後継者に指名された故・胡耀邦、趙紫陽、江沢民の三氏のうち、胡氏は中央軍事委ポストにはつけないまま、趙氏も第一副主席レベルで失脚した。人民解放軍内にほとんど手足がないのに、江氏がいきなり主席に就任したのだから、調整にある程度時間がかかったのは当然かもしれない。こうした人事を今の時点で行った理由としては、鄧氏の健康



加々美 光行氏
アジア経済研究所主任

「政権安

不安がある、と思う。後継者育成を過去二回失敗し、自らの肉体的限界が近づいていることか



体験している鄧氏がそのことを知らないわけではない。華任イコール引退とはいえない理由がそこにある。鄧氏は軍事委主席のポストを去ったあとも、間違いなく最高実力者であろう。江沢民総書記は、電子工学の専門家、電子工業相、上海市長、上海市委書記、政治局員などを歴任しているが、軍とのかわりはまったくない。六月の中央委第四回全体会議（四中全会）で総書記に昇格した時も、党務と軍との関係の薄さが指摘されていた。「人治」の要素が強く、軍政、軍令の機能的な命令系統が希薄な解放軍の手腕は、軍の長老でないといえられないとされ、江総書記にその実力があるかという点、否定的にならざるを得ない。

を軍に迎えるかわりに、軍関係者が入ってくるのが考えられる。軍の発言力が増してくるのはなかろうか。

軍長老らに 不満を残す



嶺雄鳴

東京外大教授

ちょっと意外といえば意外だった。中国はいま、党政治局が天安門事件の処理をはじめ重要問題で、保守派の中の強硬派といわば妥協派に真っ二つに割れている微妙な時期だ。しかも、天安門事件で功績があったとされる楊尚昆・国家主席が後がまを狙っていた。そうした中で江沢民氏を後継に持ってきたのは、文民指導体制をつくらうという鄧小平氏の考え方からすればなるほどと思わせる。しかし、形の上で文民指導体制への第一段階とみえても、指導部内に多くの不満を残しており、かえって今後、問題を残すと思われる。

まず、軍の長老が不満だ。楊尚昆、楊白冰両氏や李鵬首相ら天安門広場の武力制圧事件で自ら手を汚した人たちも大きな不満を持つだろう。いま中国が普通の状態にあれば別かもしれないが、戒厳令が敷かれていたような時に、江氏でなくても持ちこたえられないだろう。

軍内にはさらに、改革派に同情的な勢力もいるわけで、江氏自身、手腕がないのに持ち上げられても困ると思っているのではないか。鄧氏の立場からみれば適当とみえる人事でも、かえって鄧氏の目指す結果は実現しにくくなったといえる。

今後は、戒厳令の解除の時期がまず問題になってくる。破綻（はたん）した経済の立て直しもある。

もう少し詳しい人事をみてみるとわからないが、強硬派、妥協派そして趙紫陽氏につながる改革派の間での権力闘争はより複雑な形になって続くことになるだろう。

ら、鄧氏としてはかなりせっぱつまった思いがあっただろう。

軍内部に強い影響力を持つ楊尚昆、白冰兄弟とどう折り合いをつけるか、が焦点だったが、江沢民氏が主席に就く一方、楊尚昆氏は第一副主席に、白冰氏は秘書長にそれぞれ昇任させて

バランスを取ったのだろう。その意味では、妥協の色が強い人事だが、軍組織を楊兄弟が握っていることに変わりない。

比較的「穏健派」とのイメージがある江沢民氏を看板に立てて、天安門流血事件の当事者楊尚昆氏が「院政」を敷くことも考えられる。

軍事委秘書長に押し込むことに成功しており、かろうじて妥協が成立した人事だといえる。

鄧氏は後継体制づくりでは、晩年の毛沢東と同じことをやっている。毛沢東は晩年、四人組を呼んで「徒党を組むな」と指示した。

今回、鄧氏も天安門事件直前の五月三十一日に李鵬首相らを

決定「期待できぬ

毛沢東、鄧小平というカリスマ的指導者から、いかにして文民による集団指導体制に移行していくかが中国の政治的課題であり、鄧氏の意思でもある。鄧氏が江沢民氏を後継にできたことは彼の描いた構想が生きていると言えるが、一方で、後継の

地位を強く求めていた楊尚昆・国家主席も弟の楊白冰氏を中央

呼んで同じ注意をしている。そして、毛沢東が四人組の頭越しに華国鋒を後継に指名したように、鄧氏は楊氏を抑える形で江氏を名指しし、「江沢民のもとに団結せよ」と言明していた。

しかし、上海という地方の党幹部から中央入りした江氏が軍にも党にも基盤を持たないのには明らかだ。

ここでも地方から突然、中央に引き上げられた華国鋒の場合と同じことが言える。鄧氏としては、江氏に早い時期に実績をあげさせようとするだろう。

鄧氏にあと二年あれば相当なことができるが、綱渡りので中国の政権が安定したとは言えない。胡耀邦、趙紫陽両氏による後継づくりの失敗に続き、今回も文民指導体制の確立に失敗する危険性は高いと思う。